



故丸山晴久氏をしので

——三回忌をむかえて——

今年もまたいつも変わらず研究所の桜の花がほころび始めた。丁度2年前の4月7日を思い出す。この桜の下で、春とはいえ冷めたい小雨の降る日、おどろきと悲しみを胸に告別式にかけつけた大勢の人達が見送る中を静かに霊柩車が研究所の門を出て行ったことを。それは1946年から26年間にわたり、数々の研究業績を残された丸山氏にとって研究所生活の最後の別れの日であった。

丸山氏は1972年4月6日未明48才の若さで、北品川総合病院の一室で潰瘍性大腸炎のため逝去された。1944年気象技術官養成所本科を卒業後、直ちに海軍予備学生となり、終戦後一時郷里の松本測候所に勤務したが、1946年からは、気象研究所に勤務され、逝去される約一カ月前に全身が衰弱され、ほとんど強制的に入院させられるまで一貫して研究生生活を続けてこられた。この間、1957年からは応用気象研究部第二研究室長として室員の研究を指導するとともに人工降雨や成雨機構等の特別共同研究にも積極的に参加し、多くの業績を残されている。ちなみに、これらの業績の一部である「氷晶核の研究」については、1961年各古屋大学において理学博士の学立を授与され、ついで1966年には優良研究として運輸大臣表彰を受けている。

雲物理研究の中でも晩年の故人が最も興味を持ったのは、自然氷晶核の起源についてであったと思われる。この問題を追及するために自然氷晶核の濃度を昼夜をわかつず長年にわたって研究室の一隅で黙々と測定されていた姿が今でも眼に浮ぶ。このような地味なねばり強い努力の中で、1962年の三宅島火山爆発と自然氷晶核濃度増加との関係や黄砂と氷晶核との関係を立証し、さらに流星塵の関連からそれらの周期と降水量パターンの統計的研究に進まれている。

故人の性格は、このような統計的立証だけでは満足せず、野外観測や室内実験にこれらの問題は持ち込んで実験的にも実証せずにおられなかった。このため実験手法や測定手法の開発にも努力され、mixing typeのcold chamber法、filter法等を考案し、また自然氷晶核の自動連続測定機も開発している。このように、自然氷晶核の研究だけを取上げてみても、測定法の開発、野外観測、室内実験、統計的研究、電子顕微鏡による核物質同定の研究等、自らの手で作った測定器で、自らの身体で観察した事実に基づいて研究を進め、しかも、総合的な学問的体系化を計らずには満足し得なかった故人の真摯な研究態度が伺えるのである。

故人のこの研究態度は全くその性格から滲みでたもので、日常生活の中でも正義感が強く、指導性と行動力に富んでいた。たとえば忙しい研究生生活の中で、研究部の後輩を集めて推計学や理論気象学の講義を行なって研究部全体の質的向上をはかるとともに、研究者の研究しやすい雰囲気作りに犠牲的とも思われるほどの努力を払われた。

研究面においては、極めて厳しい態度を示す反面、一旦研究を離れると底抜けに朗らかに明るく、暖い人情の持ち主であり、休み時間には、若い人達とのバトミントンに熱中し、時には若い連中とともに、スキーやドライブなどを楽しんでいた。今にして思えば、特になくなられる一年程前から自動車の運転に熱中し、戦争で抑圧されがちであったであろう青春時代の楽しみをドライブで一気に取り戻そうとするかのようであった。あるいは、研究面で絶えず自ら路を作り、独りで先頭を歩まねばならなかった故人が、死の近い事を予感し、短い生涯での最後の息抜きを気儘なドライブに託したのであったらうか。

1972年2月、軽井沢の野外実験では前年の11月頃からの体の不調にもかかわらず、いつもと変わりなく仕事をすゝめられたが、気象条件が思わしくなく一旦帰京、再出発、この時はもうすでに周囲の目には症状の悪化がはっきり見られたが、日頃からのファイトで野外実験を完遂された。その意志の強さにはおどろくばかりだが、あるいはこのことが時期を失する事になった様に思えてならない。

私達は弔文の一節を今ゆっくりと思い出す。『何が君を早死させたのであろう。やりたいこと、やるべきことを山と残して。聡明な君だが、こと自分の健康管理については頑固だったと云う人もいる。それも事実だろう。だが君をこうまで駆りたてた何かがあるように私は思えてならない』。誰がみても頑健な体力と超人的な精神力を持った人であった。その人の祭壇に向って語りかけられたこの弔辞の言葉を改めて意味深いものと思う。

故人の三回忌にあたり、つつしんで富福をお祈りするとともに残された御令閨と早稲田大学理工学部在学中の御子息の御多幸を祈念しつつ筆を擱く。

(森口 実、北川寿江)

「天気」21. 7.